

自己弁護の「ものだから」-
説得の「のだから」、理由の「から」と比較して

高 宮 優 実

Monodakara of Self-Protection :
Comparison with *Nodakara* of Persuasion and *Kara* of Reason

Yumi Takamiya

Acquiring the appropriate usage of the three forms of the conjunction “because” and distinguishing *monodakara* from *kara* and *nodakara* is difficult for learners of Japanese. None of the previous studies of this issue (e.g., Hashimoto, 1997 ; Kuno, 1973 ; Kuwahara, 2003 ; McGloin, 1989 ; Noda, 1995 ; Shimomura, 1988; Tanabe, 1998) compares the use of all three conjunctions or explains the difference clearly. The present paper attempts to clarify each structure’s functions by analyzing Japanese discourse. The three conjunctions, *monodakara*, *kara*, and *nodakara* were examined and analyzed in terms of the following three categories : 1) cases where only one of the conjunctions is appropriate and where the other two cannot be substituted, 2) cases where either of two conjunctions could be used but where the other one cannot be substituted, and 3) cases where any one of the three conjunctions could be used. The results show that *monodakara* is used when the speaker wants to avoid taking responsibility or to protect him/herself. The reason given is not personal ; rather, it is acceptable for people in general. *Nodakara* is used when there is a conflict between speaker and hearer and the speaker wants to persuade the hearer of the validity of the reason. Finally, *kara* is used when giving a personal reason. The reason is not necessarily acceptable to all, but the person who gives the reason asserts that he/she is the one who takes personal responsibility for the reason.

1. はじめに

学習者の誤用から文法上の問題に気づくことは多いが、「のだから」の誤用の一例として、次のようなものがある。

(1) 教師：昨日は学校を休みましたね。どうしたんですか。

学生：昨日は熱があったんですから、一日中家で寝ていました。

(教師と学生の会話)

この「のだから」は、「から」や「もんですから」に置き換えると自然である。なぜ「もの」を付け加えることによって、この表現は自然となるのであろうか。さらに、中級レベルの教科書には、次のような会話がある。

(2) 山田：あの、突然ですが、今度の土曜日の晩はお忙しいですか。

ホワイト：いいえ、別に。

山田：じゃ、うちへ遊びにいらっしゃいませんか。私がうちでよく先生のお噂をするもんだから、家内も一度お会いしたいなんて言っているんですよ。夕食は家内が腕をふるってくれるそうですから。

ホワイト：そうですか。

(『中級の日本語 An integrated approach to intermediate Japanese』)

多くの学生が、ここで使われている「もん」は何かという疑問を抱く。それは、「から」や「んだから」という既習の語とどう違うのだろうかという疑問である。ここでは「もんだから」を「から」や「んだから」に置き換えると不自然である。日本語の教室では、「もんだから」を使う理由を間接的に理由を言うことができるからと説明することが多いが、それだけでは理解する上で不十分である。そこで、1) 「ものだから」と「のだから」はどう違うのか、2) 「ものだから」と「から」はどう違うのか、3) これらの誤用のもたらす違和感はどこからくるのか、

4) このような誤用を避けるためにはどのような指導が可能であるかを検討することにした。

2. 先行研究

2.1 「から」と「のだから」について

横林・下村(1988)は、「から」について、原因や理由を主観的に表し、後の文に推量、要求、命令などの形が使えると説明している。McGloin(1989)は、この「から」の前に「んです」をつけることによって、相手を咎めるニュアンスが生じるとし、次の二つの例文を比較し、説明している。

(3 a) お金がないんだから無駄遣いをしないでください。

(3 b) お金がないから無駄遣いをしないでください。

(3 b) が、単に理由を説明するだけの表現であるのに対し、(3 a) には、批判的で、非難するトーンが含まれる。つまり、(3 a) では、話し手は聞き手に自分たちにはお金がないことを理解しているべきだと責めていることになるのである。この非難がましいニュアンスは、相手も同じ情報を共有しているということを、相手に押し付けているところから生じている。Kuno(1973)は、(3 a) (3 b) とほぼ同様の例について説明しており、(3 a) の場合は聞き手が無駄遣いをしていることを疑っており、お金を使い過ぎないようにお願いしていることになる。従って、もしも無駄遣いをしている兆候の全くない相手にこのお願いをした場合には、非常に失礼な依頼になる。このような「のだから」について、野田(1995)は、聞き手が明らかに知っているはずの事態を「のだから」を用いて従属節に示すと、聞き手が認識すべきことを十分認識していないことに対する非難が強く示されるとしている。つまり、話し手は、聞き手が前件の事態を知っているはずだが、後

件の判断に至るほど十分には認識していないとみなし、十分認識させるために前件の事態を改めて「のだから」を用いて示すことになるのである。そして、「のだから」には、必然性のニュアンスが含まれており、条件がそろわないと「から」には置き換えられないとしている。桑原(2003)は、話し手と聞き手の間に判断・立場の対立があって、話し手がそれを明確に意識して、聞き手に対して同意・同調することを強く求める場面では「のだから」が使われると述べ、この場合、「非難」ではなく、強い「同意」を求める表現であるとしている。一方、話し手と聞き手の間に判断・立場の相違があっても、話し手が強いて同意・同調を求めなければ「から」を用い、さらに、判断・立場の相違を表面化させたくない場合に「から」を用いると説明している。

2.2 「もの」について

田辺(1998)は、解説・説明の「ものだ」では、前述のある特定の実質名詞に触れるのではなく、事態の起こった背景や状況について、聞き手の理解を助けるように情報を附加するときに使われると述べている。また、橋本(1997)は、「もの」は話し手自らの倫理によって事態を説明し、相手にも同様の認識を押し付ける機能があると述べ、「話し手の倫理」を相手に承認させるという性格上、自分の立場を説明する場合に弁明し正当化(防衛)するニュアンスが加わるとしている。この理由説明の「もの」では、前の文脈で話し手の意図に沿わない展開がある場合、それに対して敢えて話し手の倫理を提出すれば、自己の正当化を主張することになり、反発や不平・不満のニュアンスを帯びるといふ。しかし、話し手と相手との間に「仲間意識・身内意識・連帯感」がある場合、自分の倫理は了解してもらえらるだろうとの見込みから、甘えや馴れ馴れしさが生じることもある。こういった親密な関係が成立している場合の理

由説明に、「もの」ではなく「から」を取って使うと、嫌味や冷淡な印象を与えることがあるという。その原因として、「から」が主観的な原因・理由を直接的に述べる接続助詞であるのに対して、「もの」はその因果関係が「から」ほど明確ではなく、さらに「もの」は使用される相手との間に前提として「仲間意識・身内意識・連帯感」が了承されているためである点を挙げている。しかし、親密な関係を前提としない一般的な例は検討しておらず、「から」や「のだから」との違いは依然不明である。

3 結果

3.1 「ものだから」で接続すべきで、「のだから」「から」で置き換えられないもの

分析に先立ち、まず、冒頭で挙げた教科書の例文を詳細に見てみる。この会話は、東京で、会社の課長に英会話を教えているホワイトが、電話で課長の家に招待される場面である。山田は、誘いかける際に、「私がうちでよく先生のお噂をするものだから、家内も一度お会いしたいなんて言っているんですよ。」と言っている。噂は、良い内容であることもあるが、一般的には悪いものが多い。よって、先生、つまり誘う相手であるホワイトのことを噂しているという状況を当の本人に伝え、しかも、具体的にどういう噂をしたか内容を伝えないというのは、相手に嫌悪感を抱かせる危険性を含んでいる。しかし、ここでは、突然家に招待することになった理由は、噂を聞いて親近感を持った奥さんが会いたいと言ったからである。奥さんが腕をふるってご馳走を作ってくれるということはホワイトにとっては良いことであると思われ、この条件を併せて提示することにより、「噂をしていた」状況が許されるのではないかという甘えが見られる。ここで「ものだから」を使っているのは、自分

を弁護しているということと、噂をしているということを言うにしてもなるべく間接的に伝えようという意図が見られる。またこの「ものだから」は自分だけでなく、家内も同時に弁護していると言えよう。家内に先生に会いたいと思うに至った理由は自分が先生の噂をしたせいなので、家内を責めないでほしいという意図も見られるわけである。ここで「のだから」を使うと、不自然である。それは、「のだから」は相手が知っているはずだと説得する理由となるので、相手との対立点がなければならぬからである。噂というのは相手がいないところであるのが前提であることから、相手が噂されていることを知らない状況では、対立点はないということになる。さらに、ここで「から」を使うと、ただ単に後件の原因、理由として前件を示しているというだけであって、噂をしている状況を本人に言うことに何のやましきもなく当たり前のように言っていることになるため、不適當である。

本研究では、数多くの談話に現われる表現を検討した結果、自分を弁護したい場面においては、「ものだから」が使われていることがわかった。以下に、そのうちのいくつかの例を紹介する。次の例は、ピアノの発表会の費用を、教師がかなり個人的に負担することになってしまった経緯と、少しでも自分たちの負担する額を増やすために努力したことを、主婦同士が話している自然会話からのデータである。

(4) A: あのと、先生のお気持ちを害してもいけないから。

B: はい。

A: そのへんのこと、難しいわね。

B: まあ大変でいらっしやいましたこと。

A: それからかかった分はぜひって私たちもね、3人で言ったんですけどね。あのなにしろ先生のご希望が強いもんですからね。

B：そうでいらっしやいますか。

A：ええ、ですから少しでもあんまりにも多いといけないので

B：ええ。

A：四千円を五千円にあげて頂いて、あの、納めたんですけども
ね。

B：ああ、そうでしたか。じゃ、またいろいろと大変で
いらっしやいましたね。

(日本人主婦の談話)

教師に多くの金額を負担させることになったというのは、言いづらい
状況である。ともすると、相手に「先生に負担させるなんて」と非難さ
れ兼ねない状況である。そういった状況を回避するために、教師自身
の希望が強かったから仕方がなかったのだと言うことで自己弁護してい
ると思われる。ここでもし「のだから」を使うと、「先生のせいであ
りう結果になった」と非難する意味合いが含まれる。「から」を使うと、
教師に負担させる結果になったことを特に言いづらいたとも思わず、ただ
単に理由を述べているような形となる。教師の厚意について述べる際に、
まるで非難するかのように「先生の希望が強かったから」と言うことは
不適當である。

次は黒柳徹子(K)と三国連太郎(M)の対談である。三国が、中国
に兵隊として派遣された後、九州に帰った直後のことについて話をし
ている。

(5) K：あ、三国さんは、じゃ、兵隊さんの経験がおありで？

M：はい、一年八か月くらいですが。

K：あら。

M：それで中国で終戦になって九州へ帰ってきまして、そこでヤ
ミ屋をやりましてね、食うことができないもんですから、闇

せっけん、なんか作って売ってたんですよ。で、経済統制令にひっかかりまして、追われるごとく宮崎を捨てて、それで鳥取へ言って、鳥取の知り合い — 満家公社にいらっしゃった岩本っていう方を頼って行って、そこでそういう農民運動みたいなことを始めたわけです。

(「徹子の部屋」黒柳徹子)

聞せっけんを作るという反社会的な行為を、どうしてもせざるを得なかったのだと弁護する意図を伝えるには、ここでは「ものだから」を使うのが適切である。次は黒柳徹子（K）と羽仁進（H）の対談である。子どもに学校をやめさせた理由について説明している。

(6) K：未央ちゃんを、小学校四年生のときに、学校やめさせちゃったでしょう？

H：ええ。

K：あたくしなんかも小学校一年生で……。それはあたしの親がやめさせたんじゃないくて、学校の先生があたしをやめさせたんですけど。

H：そうらしいですね。僕の娘は、学校をなにも無理にやめさせたわけじゃないんですけど、ちょうど、アフリカで仕事をするし、やっぱりそういう大自然の仲で生活するのはいいんじゃないかと思って、前から子どもにすすめてたんですよ。初めは、「ライオンに食われるから」なんて怖がってましたけど、そのうち行ってもいいって言い出したものだから、それで長い間……。二年ぐらいアフリカへ行くことになったもんで……。

(「徹子の部屋」黒柳徹子)

ここでも、子どもに学校をやめさせたということを伝えるのは、気が

ひけるのであるが、子ども自身も希望したのだということで、自己弁護していると捉えることができる。この場合、子どもが、「言い出したから」というと、子どもが学校を辞めることになった全責任を子どもに押し付けているようなニュアンスとなる。子供自身が希望したのだから、学校をやめさせることになったのは当然であるというような意味である。ここでは黒柳にとっては「子どもが行ってもいいと言い出した」事実は知りようのない事実のため、「のだから」は使えない。次の例も、黒柳徹子（K）と羽仁進（H）の対談からのものである。ペットのハリネズミについて説明している。

(7) K：(ため息をついて) うわー、いいなあ。これはいつもおうちに……。

H：ええ。それでね、こういう動物がだいぶいっぱいになって、今、海にいるもんですから。

K：おすまいが海の近く？

H：ええ。砂があんまり好きじゃないもんですからね、広田さんというお友達が近くに住んでいらして、そこは土のお庭があるもんですから、これの仲間が……。兄弟があと三人ぐらいいいて、一緒に土の中に穴を掘って入ってしましてね。

(「徹子の部屋」黒柳徹子)

黒柳はハリネズミを飼っていることを羨ましがっている。羨ましがっている相手に対し、1匹ではなく、たくさん飼っているということを伝える際に、たまたま住環境がそれを許すからだとして自己弁護する意味で、「海にいるもんですから」と言っていると思われる。また、ハリネズミはあまり砂が好きではないため友達の庭を借りて飼っていると伝える際に「もんですから」を使ったのには、友達の庭を厚意で借りているということを伝える意図があると思われる。もしここで「から」を使う

と、友達の庭には土があるから当然そこを借りている、というような横柄なニュアンスが入る。また、これらの事実は黒柳の知らない事実のため、「のだから」は使えない。

3.2 「のだから」で接続すべきで、「ものだから」「から」に置き換えられないもの

相手を強く説得する場面では「のだから」が使われる。次の例は、流産した妻（お作）が、子供の顔も見にこなかった旦那（新吉）を責める場面である。

(8) いくら何でも自分の血を分けた子だのに、顔を見に来てくれなかったのは、私はとにかく、死んだ子が可哀そうだと怨んだ。新吉も詳しい話を訊いてみると、何だか自分ながらおそろしいような気もした。そういう薄情なつもりではなかったが、言われて見ると自分の心はいかにも冷たかったと、つくづくそう思った。

「私はまた、どうせ死んでるんだから、なまじ顔でも見ちゃ、いい心持ちがしねえだろうから、見ないほうがましだという考えで……。それにあのころは、小野の公判があるんで、東京から是非もう一人弁護士を差し向けてほしいという、当人の希望（のぞみ）だったもんだから、お国と二人で、そっちこっち奔走していたんで……友達の義理でどうもしかたがなかったんだ。」といいわけをした。

「それならせめて初七日にでもいらして下されば……。」とお作は目に涙を一杯溜めて怨んだ。

（「新世帯」 徳田秋声）

「のだから」で導かれる前件は、話し手の提案に反対している聞き手を説得するのに最も効果的、と思われるものが選ばれている。どうして

自分の血を分けた子どもの顔すら見にこなかったのだと責める相手を「もう子供は死んでしまった。死んでしまった子供の顔を見ると自分にとってもショックが大きいから見られなかった」と説得している。しかも、その理由は「のだ」をともなって確かな事実として聞き手に提示されている。子供の顔を見なかったという確かな事実の一つの側面に、子供は既に死んでしまった、ということがあり、話し手はこの側面を取り上げて説得の理由にしている。確かな事実が理由となると、聞き手は反論しにくい。この用例の「のだから」を「から」に置き換えると、不自然である。それは「死んでいる」ことがこれまでの会話とどのように関係しているのかが明確ではないからである。また、この用例の「のだから」を「ものだから」に置き換えることはできない。「ものだから」は自分のことについてしか使うことができないからである。

次は、アメリカに留学する日本人大学院生であるF（40代）とI（20代前半）が、留學生活について話している場面である。1年間の交換留學のうち半年が過ぎたのに、特に何を勉強したという実感もなく、英語も上手にならないままだということを嘆くIをFが励ましている。

(9) F：でもね、もう半分きちゃったんだからな。

I：そうですね。なんか、はやすぎますね。ちょっと。何にもしないうちに半年がすぎたって感じですけどね。

F：まあでも、まだ半年あるんだからがんばらなきゃな。

I：そうですね。

F：この前教えてやったろう？なんだっけ、コップに半分・・・

I：水があります。

F：それをどうやって表現するかだろう。なんていうんだっけ？

I：まだ半分もある。

F：うん、そうだろう。もう半分しかない、じゃないんだ。まだ

半分もある。そういう肯定的な態度が大切なんだ。それだけ
長くこう人生を教えてるんだからな、おまえ、もう何かお前、
俺にしたっていいだろう？

I：だから言ってるじゃないですか、

F：だからMP 3置いてけって。

I：あれがあるじゃないですか、MDが。

F：お前に人生教えてるんだからな、お前。

I：(笑い)

F：お前これ普通だったら、お前、こんなお前、タダじゃ、お前、
それをご馳走してもらってるんだからな。ただでご馳走して
もらって、人生教えてもらってるんだからな。お前。

(日本人大学院生同士の会話)

ここにはFとIの間に意見の対立があって、それを説得する用法として「のだから」が使われている。Iが何もしない間に過ぎてしまった半年を後悔しているのに対し、Fはまだ半年ある、と肯定的に捉えるよう励ましている。ここで「半年あるから」と言った場合、残りの半年がんばればいいということを強調するニュアンスが消えてしまい、ただ単に半年間という時間が残っている事実を伝えることになり、励ましていることにはならない。「ものだから」は自分のことに対して使われるので、「半年ある」という相手もよく知る事実については使うことができない。会話の後半、励ましが興じてFは強迫じみた言動をはじめ。「人生を教えているんだから」というのは、相手からの感謝を強要している。FとIの間には強い信頼関係があるので、ここで強迫のように「のだから」を使われても、始終Iは笑って応対している。これをジョークだと思えることができるからである。お互いに信頼関係と強い友情がなければこういった「のだから」の使い方はできない。ここで「ものだから」を

使うことができないのは、ご馳走してもらい、人生を教えてくださいという相手の行動には「ものだから」を使うことができないからである。また、ここで「から」を使うと、相手を強迫するという迫力や面白みが失われてしまうであろう。

3.3 「から」で接続すべきで、「ものだから」「のだから」に置き換えられないもの

原因、結果を直接つなぎ、一般的な理由であって、個人的でない場合には「から」が使われる。次の例は日本人の教師（T）と学生（S）の会話から得たものである。

(10) T：その先生は社会科の先生やから

S：うん

T：で基本的な目的として、えっと日本語の

S：うん。

T：日本での国語教育と

S：うん

T：アメリカでの英語教育を比較したかったから、探してほしいということで、デパートメントのほうに頼んで探してもらって。

（日本人教師と日本人学生の会話）

ここで「ものだから」が使えないのは、国語教育と英語教育を比較したいのは、T本人ではなく、社会科の先生であるためである。「ものである」は自分の行為以外に使うことはできない。「のだから」を使うと、Sを説得することになってしまい、ここではSを説得する必要性はないため使えない。ただ客観的に、社会科の教師がデパートメントに頼んだ理由を淡淡と説明しているだけである。この社会科の教師が国語教育と

英語教育を比較したいと思ったのは個人的な希望である。ただ、その際にデパートメントに頼むというのは、この希望をもった人なら誰しもがたどる一般的な道であるため、ここでは「から」が問題なく使われている。

さらに、次の例はアメリカに留学している日本人英語教師同士が、高校でリーディングを教えている教師には、新たに特別な資格が必要となったため、また大学で勉強することになったと話している。

(11) T：あの、僕らでも、その、教師の免状をもらうのと同じように、
そのちゃんと、あの、リーディングティーチャーになるため
の、その、サティフィケートがある、その教諭免状が必要だ
から、そういう先生はまた別に、また後からね。

S：あ、まあ、キャリアアップならびに。

(日本人英語教師同士の会話)

リーディングティーチャーになるためには資格が必要であるということは、一般的な理由である。こういった理由を表す場合には「から」が適切である。

3.4 「ものだから」と「のだから」では接続でき、「から」では接続できないもの

次は、テスト前に映画に行くことになった友人を心配するAと、どうしてそうなったか理由を説明するBの会話である。

(12) A：テスト前なのに映画行くの？

B：うん、せっかく誘われたもんだから、断るわけにはいかな
くってね。

(日本人大学生同士の会話)

この文には「せっかく」という強調の言葉が含まれているため、「の

だから」や「ものだから」と呼応させるとさらに強く言う働きがある。ここで「ものだから」と言った場合には、テスト前に映画に行くことになってしまったことへの自己弁護の気持ちが入り、「のだから」は誘ってもらったということを強く言うことで、相手を説得しようとする気持ちが入る。「のだ」は、話し手が発話を強める必要があると判断しているときに使われる (McGloin, 1988)。映画に誘われるという状況は、Bにとっては特別な状況であり、たとえ試験前でも断らず、行くことになったのだと説得している。

3.5 「ものだから」と「から」では接続でき、「のだから」では接続できないもの

次の例は、自分の子どもの買い食いが教師に見つかった保護者が別の保護者と話す場面である。

(31) A : でも先生少しそういうときにはお灸を据えてくださればよろしかったのって申しましたら、いやあまあ応援でいろいろお腹もすくだろうと思ったもんだから、まあいいんですよなんて。

B : うーん

A : おっしゃってくださいましてね。まあそれは駒沢先生ですからあなたそれですんだのよって子どもには申しましたけれども。

(日本人主婦の会話)

ここで「ものだから」を教師が使った理由は、本来、学生の買い食いというのは教師という立場上、注意しなければならないということはわかっているものの、学生が応援でお腹がすいているだろうという状況を鑑み、大目にみてあげることにしたという、自己弁護が働いている。

ここで「思ったから」というと、客観的に理由を伝えていることになる。また「のだから」はここでは使えない。「応援でお腹がすくだろうと思った」事実を、その時点では相手の主婦は知る由がないからである。

次の例は、教師が学生に、授業に遅刻した理由を尋ねている場面である。

(32) T：どうして遅刻したんですか。

S：バスが遅れたものですから、遅刻しました。

(日本人教師と日本人学生との会話)

この例では、「ものだから」を使うことによって、間接的に主張をしている。これは、遅刻の理由をパーソナルな理由ではなく、一般化することで自分を弁護しようとする意志の現われである。「ものだから」のかわりに「から」を使うと、バスが遅れることが当然のことであるかのように理由として提示していることになる。また、ここでは「のだから」は使えない。教師はバスが遅れたという理由を知らないからである。

3.6 「のだから」と「から」で接続でき、「ものだから」では接続できないもの

次は、劇の切符をなくしたある夫婦について、主婦Eと主婦Kが非難している場面である。観劇の世話をしたEとKは、誰がどの切符を買ったか記録しておく責任があったが、それをしていなかったため、切符の再発行が困難になってしまった。

(33) E：うちに持って帰られてなくされたんでしょう？

K：うん、そりゃそうなんだけれどね。だからそれはね、やっぱりこちら側は、あの、協力していただく側なんだから、やっぱりそういう姿勢っていうのは、あの、それはいけませんよ、江崎さん。

(日本人主婦の会話)

表面的にはKは相手の言葉に「うん」と返し、意見の対立はないので「から」でも言える用例である。二人の意見に対立がなければ「協力していただく側だから」と言うことができる。Kは確かに、切符をなくした本人が悪いことは認めているものの、自分たちは夫婦の協力なしには観劇ツアーがうまくいかなかったことも同時に認め、また自分たちが座席番号を記録しておかなかったミスについても認めなければいけないと説得しているのである。ここでは強く説得し、さらに「いけませんよ」と諭している場面であるため、「ものですから」と自己弁護すると、矛盾が生じてしまう。

3.7 「ものだから」でも「のだから」でも「から」でも接続できるもの

ここでは、「ものだから」、「のだから」、「から」のいずれでも接続できるが、ニュアンスが異なるという例を紹介する。次は、長距離バスの運転手が客の老女に注意している場面である。

(34) 浩介：すっげえ荷物のばあさんだ

トメ：ねえ、運転手さん。孫達ね、お兄ちゃんが中学1年。下に妹がいて・・・。

運転手：あ、おばあちゃん、後ろのお客つかえてるから、もう少しこっちによってくれる？

トメ：あら、あらあら・・・ごめんなさいね。

(シナリオ「バスで行く人」井出真理)

ここでは、老女は明らかに人に迷惑をかけることをしているのだから、「のだから」を使って注意することもできる。しかし、運転手と客、特に高齢の客という関係を考えるとき、「のだから」を使った言い方は、失礼な意味合いを伴うことは否定できない。この「のだから」は例えば

母親が大きなリュックを背負った息子に言うのならまったく問題はない。しかし、ここでは他人同士という人間関係を鑑みると、ぶしつけな表現になってしまう。そこで、老女にあまり強く注意するのを避けて、「から」を使っていると思われる。また、ここでは「ものだから」を使うこともできる。その場合、バスの運転手はなるべくお客である老女に注意したくないのだが、申し訳ないけれど寄ってもらえないだろうかという、寄ってもらうことに対する自己弁護、言い訳のニュアンスが含まれる。このように、三つとも置き換えられる場合にも、「ものだから」で言うとき、「のだから」で言うとき、「から」で言うときには話し手の説得の姿勢によって違いがあると言えるだろう。

4. 結論

様々な談話に現われる「ものだから」「のだから」「から」を詳細に検討した結果、それぞれの用法は次のようにまとめられる。

- 1) 「ものだから」は自分が気にしていること、自分を弁護したいことを言うときに使う。
- 2) 「のだから」は、話し手と聞き手に対立する点があり、説得するときに使われる。
- 3) 「から」は一般的な理由を述べる。自分個人にしか通用しない個人的な理由ではなく、その理由は誰にも受け入れられる一般的な理由だということを述べる。

「ものだから」も「のだから」も「から」も、理由を説明する機能があることは共通している。「ものだから」の一番大きな特色は、自分の行為についてのみ使え、相手に対しては使えないという点である。それに対して「のだから」は、相手の行為にも自分の行為にも両方に使え、相手に対して使った場合は非難するニュアンスが含まれる。このニュア

ンスは「ものだから」にはない。「から」は単純に理由を説明し、事実を伝えるのみの表現である。

5. 日本語教育への示唆

さて、冒頭（1）で挙げた教師が学生に対して言った「昨日は熱があったんですから、一日中家で寝ていました。」という例の違和感はどこからくるのか、ここで改めて振り返ってみたい。まず、ここでは、「から」で言うべきところを、説得の「のだから」を使って話している。話し手と聞き手との間に対立する点がないのにも関わらず、「のだから」で同調を強く求められると、何を要求されているのかが分からず、聞き手は戸惑ってしまう。さらに、学生が、教師という目上の相手に、非難のニュアンスを含む「のだから」を用いている点が問題である。冒頭の「のだから」が誤用となる大きな理由は以上2点であろう。このような「のだから」の誤用例は、「～のです」と説明をした後に、「だから」と続けたい学生の陥る罠である。また、ここで「ものですから」に置き換えると自然であるのは、それによって学校を休んだことに対する自己弁護をすることができるからである。

次に、「もん」は「から」や「のだから」とどう違うのかという学生の質問にはどう答えるべきか。冒頭の（2）の例、「私がうちでよく先生のお噂をするもんだから、家内も一度お会いしたいなんて言っているんですよ。」については、噂をするというあまり相手にとってはよくない事実を明かす際に、自己弁護する働きが「もの」にはあるため、使用が適切だということになる。「から」では、噂をしている状況を当たり前の理由であるかのように説明することとなり、不自然である。また「のだから」は相手にとって既知の情報でなければいけないため、噂をされているとは相手は知る由もないので、ここでは不適切だということ

になる。「ものだから」や「のだから」「から」の使い分けを学習者に教える際には、常に場面と関連させて学習することが求められるであろう。なお、現行の日本語の教科書では、「ものだから」の使い方の注意点を扱っているものは見当たらない。場面にふさわしい日本語の話し方の一つとして、「ものだから」を適切に使用できるようになるための教材の準備が望まれる。

6. おわりに

本研究では、「ものだから」を「のだから」、「から」と比較した。将来的には、さらに「ものなので」、「ので」とも比較することが必要である。また「もの」の機能は自己弁護以外にもある可能性があるため、さらに数多くの談話の中の例にあたる必要があるだろう。

謝辞：

初期段階の原稿に目を通し、ご指導くださったウイスコンシン大学マディソン校のマクグロイン花岡直美先生に感謝の辞を申し上げます。

参考文献

- 桑原文代（2003）「説得の「のだから」 - 「から」と比較して」『日本語教育』117, 63-72.日本語教育学会
- 田辺和子（1998）「形式名詞「モノ」における文法化としての文脈化と主観化」『日本女子大学紀要文学部』47, 51-65.日本女子大学
- 野田春美（1997）『「のだ」の機能』くろしお出版
- 野田春美（1995）「「のだから」の特異性」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』221-245 くろしお出版

- 橋本佳美 (1997) 「終助詞「もの」 - 「話し手の倫理」による説明」『大阪外国語大学日本語日本文化研究』7, 201-211.大阪外国語大学
- 横林宙世・下村彰子 (1988) 『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ6 接続の表現』荒竹出版
- Kuno, S. (1973). *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA : MIT Press.
- McGloin, N. H. (1989). *A Student's Guide to Japanese Grammar*. Tokyo : Taishukan.